H-2 南琉球与那国方言における動詞のアクセント交替の共時的・通時的分析[1]

中澤　光平[2]
（国立国語研究所）

キーワード：与那国方言，音韻論，動詞，活用，アクセント

要旨

南琉球語群広域八重山語与那国方言（以下，与那国方言）には動詞のアクセントに A, Bb, Bc, Bcc, Bccc, C の 6 つのパターンが認められる。日琉諸語の多くは動詞アクセントの系列に 2 パターンの対立しかなく，与那国方言の区別が古いものか新しいものかが問題となる。本発表では，共時的および通時的観点から，非 A 型の交替パターンのうち，例外となる Bccc および C を除いた Bb, Bc, Bcc の違いは語幹の長さと語幹末音に基づいて与那国方言で生じた改新であって，共時的にも通時的にも 1 パターンと見なせることを主張する。また，動詞アクセントと活用形をもとに，与那国方言にはかつて接続形と連用形の区別があったこと，アクセント上例外となる例は概ね通時的に説明可能であること，二重母音と撥音では音節量の共時的扱いが異なることを主張した。動詞アクセント交替は，複合語などにも見られる C 型 ＞B 型という与那国方言に推定されるアクセント変化を支持する結果となった。

1.　はじめに

与那国島（沖縄県八重山郡与那国町）の主に 60 代以上の高年層で話されている与那国方言では，動詞のアクセントが活用によって交替する。この交替がどのような原理に基づくのか，先行研究および発表者の調査データをもとに考察することが本研究の目的である。

1.1　与那国島及び与那国方言について

与那国島は沖縄県八重山郡に属し，八重山列島を構成する，日本最西端の島である。沖縄本島からは南西へ約 509 km の距離があり，八重山列島の中心的な島である石垣島からも約 127 km 隔たっている。

与那国方言は与那国島で伝統的に使われている言語で，久部良では沖縄本島の影響が強いことを除けば，集落間の差はほぼない。/a/, /i/, /u/（母音）, /P/, /b/, /m/, /t/, /T/, /d/, /n/, /r/, /C/ [ʦ], /s/, /k/, /K/, /g/, /ŋ/, /h/（子音）, /j/, /w/（半母音）, /N/（撥音）の音素を有する（撥音以外の大文字は無気喉頭化音を表す）[3]。

2.　先行研究

本節では，与那国方言のアクセント体系および動詞アクセントに関する先行研究を整理する。

2.1　与那国方言のアクセント体系

与那国方言が三型アクセント体系（アクセント単位の長さに関わらず 3 つの型が区別される体系）であることは，平山・中本（1964）で明らかにされている。本発表では上野（2010, 2011, 2012, 2014, 2015）

---

[1] 本研究は以下の支援を受けています：国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（代表：木部暢子）および新学術領域研究「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」（研究課題：18H05510）

[2] k.nakazawa@ninjal.ac.jp

[3] 母音，半母音で始まる語の前に/’/を音素として認めるべきかや，促音，長音の認定については保留する。

などの一連の先行研究に従い，3 つの型に A 型，B 型，C 型のラベルを与える。A 型は概ね高平調，B 型は概ね低平調で，C 型は A 型に似るが後続するアクセント単位を下げる。上野（2010）に従い，A 型に/ = /，B 型に/ _ /，C 型に/] /の記号をアクセント単位の末尾に付ける。

与那国方言の A 型，B 型，C 型は，松森（2000, 2012）が示す琉球祖語に再建される系列別語彙の A 系列，B 系列，C 系列にそれぞれ概ね対応する。松森（2000）と上野（2015）から対応語を挙げる。

(1)	系列	沖永良部（正名）	与那国	意味
	A	ada	’ada=	ほくろ（〈あざ〉に対応）
	B	ja:	da:_	家（〈や〉に対応）
	C	hagi	haN]	足（〈はぎ〉に対応）

用言（動詞，形容詞）について，松森（2012）は，「本土祖語と同じく琉球祖語にも，動詞，形容詞に二つの系列があったことが推定でき」るとして，「A 系列」と「B 系列」を立てる（松森 2012: 34）。用言の 2 系列は, 本土方言における類別語彙の第 1 類, 第 2 類（金田一 1974）にほぼ対応する。松森（2012）と上野（2010）から対応語を挙げる。

(2)	系列	沖永良部（知名）	与那国	日本語
	A	asjibjuN	’aNbuN=	遊ぶ（第 1 類）
	B	utijuN	’uTiruN_	落ちる（第 2 類）

すなわち，A 系列には A 型，B 系列には B 型が対応する。

ところが，与那国方言の動詞のアクセントは，活用によって交替することが明らかになっている。上野（2011）に挙げられている活用形の一部を抜粋して表 1 に示す。

表 1　与那国方言の動詞の活用形とアクセント交替

	A 巻く	Bb 折る	Bc 言う	Bcc 書く	Bccc 来る	C ある[4]
現在止	maguN=	buiCaN_	NduN_	kaguN_	kuN_	aN]
2 過止	maTiTaN=	buiCaTaN_	NTaN_	kaTiTaN]	suTaN]	aTaN]
現否止	maganuN=	buiCanuN_	NdanuN_	kaganuN]	kunuN]	(aranuN])
～て	maTiTi=	buiCasiTi_	NdiTi]	kaTiTi]	siTi]	aiTi]

基本形（表 1 の「現在止」を本発表ではこう呼ぶ）が A 型 / = / のものは活用形全てが A 型で一貫するが，基本形が B 型 / _ /のものは B 型で一貫するもののほかに，段階的に C 型 /] / と交替するものが見られる。基本形が C 型の動詞は活用形も C 型でほぼ一貫する。

動詞のアクセントが 2 系列の対立に収まらないことは他の日琉諸語にも見られるが，それらは分節音による変化や複合動詞に由来するなど二次的に生じたものと考えられる。例えば，東京では動詞のアクセント（基本形）は原則として無核か次末拍（penult）に核があるかの 2 パターンだが，次末拍が特殊拍や二重母音の後部要素の場合，次々末拍（antepenult）にアクセント核がずれる（例：オ「トース「落とす」，サ「ガール「下がる」，「カーエス「返す」，「トーール「通る」）。また，京都で基本形が ○○「○ となる 3 拍動詞は複合動詞に由来する（例：アル「ク「歩く」＜有り行く，ハイ「ル「入る」＜這ひ入る。上野

[4] aranuN]はコピュラの aN「である」の否定形で「違う」の意。「ある」の否定形は minuN]「ない」になる。

2000: 54)。ところが，与那国方言の場合，分節音の条件もなく，単純動詞にも複数の交替が見られる。

表 1 のうち，C は不規則動詞の aN「ある」のみであり，Bccc は kuN「来る」，umuN「思う」の 2 語しか見つかっていないのでこれらを例外として扱うとしても, Bb, Bc, Bcc はそれぞれ一定数存在する。もしこの交替が語ごとに指定されているとすれば, 話者は非 A 型の動詞がいずれのアクセントパターンに属しているかを動詞ごとに記憶していることになり，他方言と比べても記憶の負担の点で不自然である。また，通時的観点からも，それぞれのアクセントパターンを祖語に再建する必要があるか，すなわち，松森（2012）が B 系列としてまとめた動詞に更なる区別を設ける必要があるかが問題となる。

上野（2011）のデータを見ると，Bb パターンの動詞は kiduŋiraN「蹴る」，NnariruN「見える」，uduruguN「驚く」のように語形が長い語が多く，一方で Bcc パターンの動詞は CuN「切る」，KuN「吹く」，dumuN「読む」のように語形が短い語がほとんどで，最も長いもので haNKuN「はじく」である。このことから，非 A 型動詞のアクセント交替は，語形の長さが関わっていることが予想される。

3.　調査と結果

前節で述べた先行研究の状況を踏まえ，与那国方言の動詞アクセントの活用による交替は語形の長さと関係するという仮説を検証するため，与那国島でのアクセントの現地調査を行った。

3.1　調査内容

2017 年 12 月～2020 年 3 月に与那国島で現地調査を行った。本研究の調査には 3 名の話者（全員男性）に協力していただいたが，今回の分析に用いるデータは次の話者から聞いたものである。

(3)　崎原　用能（さきはら　ようのう）　　1947 年生まれ男性

調査は発表者が作成した調査票に基づく面接調査で，1 対 1 での読み上げ形式で行い，PCM レコーダー（Olympus 製）で録音した。調査内容は，上野（2011, 2012）に上がっている動詞全ておよび発表者が若干追加した動詞と活用形である。アクセント型の認定は発表者の判断に基づく。

3.2　調査結果

上野（2011, 2012）のアクセントデータと (3) の話者のアクセントはほぼ完全に一致したため，上野（2011, 2012）に挙がっていない動詞も含め，両者は同一の体系という前提でデータを提示する。

3.2.1 A パターンの動詞

A パターンの交替を示した動詞の例を (4) に示す。

(4)　buN「居る」，CuN「知る」，baCiruN「忘れる」，baruN「笑う」，hadimaruN「始まる」，niNduN「寝る」，　//　adagiruN「伐採する」，huramuN「暗くなる」，huriNgaruN「震える」，huTaŋiruN「撒く」，iTagiruN「水をかける」，KairuN「招待する」，suruN「抱く」，tuNnaruN「退く」，uiCaraN「追い払う」，usaruN「侮る」，usubuN「俯く」，waŋiruN「追い返す」，…

//　の前は上野（2011, 2012）に挙がっていてかつ発表者も確認したもので，後ろは発表者の調査によるものである。

3.2.2 Bb パターンの動詞

Bb パターンの交替を示した動詞の例を (5) に示す。

(5) buiCaN「折る」, daNdaN「壊す」, uigaN「動かす」, uduruguN「驚く」, // aCiraN「温める」, buNgamiruN「折り曲げる」, buNKaN「放る」, duŋjaraN「怒鳴り散らす」, gjagiruN「邪魔する」, haNKuraN「ほどく」, haNKuriruN「ほどける」, kabudaguN「抱く」, kiraN「ひっくり返す」, maNgiraN「喚き散らす」, PiraNKaN「押しつぶす」, TabiraNKaN「平たくする」, …

3.2.3 Bc パターンの動詞

Bc パターンの交替を示した動詞の例を (6) に示す。

(6) aiguN「歩く」, biruN「酔う」, hiruN「行く」, huN「干す」, muiruN「生える」, naN「生む」, // biriruN「縺れる」, CidimiruN「片づける」, haraN「走らせる」, hidamuN「隔てる」, huNnaruN「準備する」, imiruN「ねだる」, kaNgiruN「背負う」, kaTaN「混ぜる」, KubamaruN「縮こまる」, kurumuN「企む」, kumaruN「籠る」, mudiruN「ねじる」, mugiruN「儲ける」, muruN「摘み取る」, muTaKuN「叱る」, sabaguN「探す」, tamiruN「真っすぐにする」, taŋaN「捻挫する」, …

3.2.4 Bcc パターンの動詞

Bcc パターンの交替を示した動詞の例を (7) に示す。

(7) CuN「切る」, duguN「休む」, dumuN「読む」, hajuN「入る」, haNKuN「弾く」, huruN「降る」, kaguN「書く」, maTuN「待つ」, NnuN「見る」, taTuN「立つ」, turuN「取る」, uŋuN「泳ぐ」, // ajuN「闘う」, CimuN「潜る」, hiŋuN「削る」, …

3.3 調査結果の整理

Bccc パターンは kuN「来る」と umuN「思う」の他には見つからず，C パターンも aN「ある」1 語のみだった。A パターンは活用による交替はないため，これ以降は議論の対象としない。

予想通り，Bb パターンは語形が長い動詞が多く，Bcc 型は語形が短い動詞が多い。ただし，基本形の音節数をみると，Bb パターンは 2 音節～4 音節，Bc パターンは 1 音節～4 音節，Bcc パターンは 1 音節～2 音節となり，Bc パターンと他との区別が問題となる。動詞の音節数は，kaguN ~ kaTi「書き」，haraN ~ harasi「走らせ」，duguN ~ dugui「休み」のように，活用によって変化するが，そのパターンは語幹末の音素によって子音語幹（例 : kag-），s 語幹（例 : haras-），母音語幹（例 : dugu-）のように分けられる。そのため，語幹によってアクセントパターンを分類すると，概ね表 2 のように整理できる。

表 2　語幹の長さとアクセントパターンの関係

パターン	s 語幹	子音語幹（s 以外）	母音語幹
Bb	語幹が 2 音節より長い	語幹が 3 音節より長い	語幹が 3 音節より長い
Bc	語幹が 2 音節以下	語幹が 2 ~ 3 音節	語幹が 3 音節
Bcc	（語例なし）	語幹が 1 音節以下	語幹が 2 音節以下

Bc の huN「干す」と Bcc の CuN「切る」は/hus-/，/C-/と語幹末音が異なるため，異なるアクセントパターンに属すると言える。また，haNKuN「弾く」（/haNK-/）が kaguN「書く」（/kag-/）と同様に Bcc パターンであることから，撥音は長さに影響しない可能性がある。他にも，duNKuN「茹でる」（/duNK-/）や kaNduN「被る」（/kaNd-/）が Bcc パターンになる。一方で，aiguN「歩く」（/aig-/）は Bcc ではなく Bc パターンであることから，二重母音は撥音と異なり，語の長さに関わる可能性がある。他にも，muiruN「生える」（/muir-/）や uiguN「動く」（/uig-/）などの二重母音を含む語が Bc パターンになる。また，uigaN「動かす」（/uigas-/）が Bc でなく Bb となるのも同様である。そのため，表 2 で「音節」としたものは，「母音音素数」など異なる表現に改めた方が適切と言える。

4. 考察

上記のデータをもとに，与那国方言の動詞アクセント交替の共時的解釈および通時的考察を試みる。

4.1 与那国方言における動詞アクセントの系列の対立数

与那国方言の動詞アクセントは活用を含めると A, Bb, Bc, Bcc, Bccc, C の 6 つのパターンがあることになるが，C は 1 語，Bccc は 2 語しか存在せず，個別の例外として処理できる。その上，Bb, Bc, Bcc は語幹の長さと語幹末音によってアクセントパターンが決まるため，これをまとめて B パターンとすれば，与那国方言も原則として A パターンと B パターンの 2 つの対立があることになる。諸方言の動詞アクセントの対立数から考えてもこの方が自然であり，共時的にもこの 2 つが話者の脳内にあるものと考える。

4.2 「語幹」を想定することの是非

表 2 に示したように，動詞のアクセント交替は，単純に語の長さに基づくのではなく，語幹末音の情報が必要になる。Bb, Bc, Bcc を共時的に 1 つのパターンとして解釈するためには，話者が語幹に基づき（個別に記憶するのではなく）アクセントを派生させていると考える必要があるが，脳内に語幹という抽象的な情報があるかが問題となる。しかし，語幹自体は抽象的であっても，動詞の活用には語幹を想定する必要があり，話者の脳内にも語幹に対応する情報が存在しなければならない。アクセント交替の説明のためにアドホックに語幹を想定するわけではないため，不自然ではないと考える。

4.3 例外の解釈

調査データには，表 2 の基準に合わない例がいくつか見られる。

(8) Bc パターンの例外：biruN「酔う」（Bcc を期待），hiruN「行く」（同左），nuruN「直る」（同左），suNKuN「引く」（同左），waruN「いらっしゃる」（同左），…

Bb パターンの例外：kabudaguN「抱く」（Bc を期待），kiraN「ひっくり返す」（同左），nagariruN「流れる」（同左），nuriruN「濁る」（同左），uduruguN「驚く」（同左），…

(8) で挙げた語を含め，(5), (6), (7) のデータの中にも，表 2 の通りにならない例外が出てくる。これらは，例外的なアクセントパターンである Bccc, C パターンと同様に，個別にアクセント情報を記憶しているとみなさざるを得ない。アクセント上不規則な動詞が多く存在することになるが，全ての動詞でアクセントパターンを個別に記憶しているとみなすよりは合理的と考える。また，これらの例外の多く

は通時的に説明可能であり，個別の例外となっていてもおかしくない。個別に登録されているアクセントは，規則的に派生されるアクセントより優先されると言える。

4.4　アクセント交替の通時的解釈

与那国方言の Bb, Bc, Bcc の各パターンが，共時的に B パターンという 1 つの系列と分析できることを述べた。ここでは，通時的観点から，B パターンのアクセント交替を解釈したい。

Bb，Bc，Bcc が元々1 つのパターンだとすれば，通時的な変化によって複数のパターンに分裂したことになる。Bb, Bc, Bcc の違いは表 1 の通りだが，再掲すると(9)のようになる。

(9)　a.　過去接辞-*Ta*-が付与されたときの音調（Bb：B，Bc：B，Bcc：B）
　　b.　否定接辞-*nu*-が付与されたときの音調（Bb：B，Bc：B，Bcc：C）
　　c.　継起接辞-*Ti* が付与されたときの音調（Bb：B，Bc：C，Bcc：C）

過去接辞が付与された場合のアクセントは一貫して B 型になるため, 通時的にも B 型が再建されるが, 否定接辞と継起接辞が付いた場合のアクセントは B 型と C 型のいずれを再建すべきだろうか。

与那国方言には語形が長くなると B 型が現れる傾向が広く見られる。例えば, 外来語のアクセントは, 概ね 3 モーラ以下は C 型，4 モーラ以上は B 型になる（上野 2014: 75）。複合語アクセントでも，長い語形では B 型になる傾向があり（中澤 2018），上野（2014: 70）に挙がっている (10) は，B 型のアクセントが改新であることがわかる。

(10)　guma]（胡麻，C）と guma’aNda_（胡麻油，B）　cf. 沖永良部正名 guma^{C}（松森 2000: 67）

沖永良部正名との対応から，単純語の C 型のアクセントが本来と思われるから，複合語で C > B と変化したと推定される。同様に，継起形のように，語形が長い Bb パターンでのみ B 型になる場合は，古くは C 型で，Bb パターンの動詞で C > B となったと考えられる。このことは，過去接辞が付く形式（B 型）と，継起接辞が付く形式（C 型）が，古くは別の形式だったことを示唆する。形態的にも，turuN「取る」（/tur-/）における *tu*-TaN_と *tui*-Ti]，turaN_「あげる」（/turas-/）における *tura*-TaN_と *turasi*-Ti]のように，-*Ta*-が付くときと-*Ti* が付くときの形式が異なる場合があり，両者は別形式だったことが支持される。-*Ta*-が付く B 型の形式を連用形，-*Ti* が付く C 型の形式を接続形と呼ぶとすれば，現在の与那国方言には連用形と接続形の（形態的な）区別は見られないが，かつては別形式だった名残が，一部の活用形の分節音の違いとアクセントの違いに反映されていることになる。

Bccc パターンの動詞は過去接辞が付いた形も C 型となる点が Bcc パターンと異なるが，kuN「来る」の過去形 suTaN]の形式に着目すれば, これは**ki-ta-*（> †TaN_）のような連用形由来ではなく, **kje+wori-ta-* のように存在動詞**wor-*「居る」（> buN）を含む形式に由来すると推定される（あるいは**ki-wori-ta-* > **kjoïta-* > suTaN の可能性もある）。kuN の接続形 si は**kje* という形式に遡る（cf. su < kjou「今日」，Cimu < kimo「肝」）。suTaN も**kjota-*のような古形が想定されるから, 連用形ではなく接続形（あるいは**ki-wor-*）由来のために C 型になると考える。同様に，umuN「思う」の過去形 umuTaN]も，**omoi-ta-*ではなく **omoje+wori-ta-*（あるいは**omoi+wori-ta-*）のように**wor-*を含む形式に対応すると推定する。umuTaN_という B 型は連用形由来の**omoi-ta-*に対応する。いずれにせよ，Bccc パターンで過去形が C 型となるのは，**wor-*を含んだ形式に対応するためであり（uTuN]「落ちた」 < **ote+wor-*のように**wor-*に由来す

る完了形も同様だろう），Bccc は Bcc の一種と見なせる（/k(u)-/, /umu-/が Bcc なのは表 2 の通り）。

このように，与那国方言では著しい音変化が生じた一方，アクセントは古態を保持する面がある。(8)も，biruN「酔う」は**wepi+wor-*，hiruN「行く」は**pa[s]ir-*，nuruN「直る」は**na'or-*，waruN「いらっしゃる」は**owar-*のように，音節数の多い語形に由来するために例外になっていると考えられる。

連用形（*B 型）と接続形（*C 型）の区別はアクセントから推定できる。発表者の調査では，-daTana「～ながら」，-biKi「～べき」は連用形に，-ŋasija「～すれば」は接続形に付く接辞となる。他方言の対応形式と比較することで，両者の区別が祖語に再建されるか明らかになると思われる。

5　まとめと課題

本発表では与那国方言の動詞アクセントの交替について，共時的および通時的観点から分析を試みた。与那国方言に多くの交替パターンが見られるのは，与那国での改新であって，祖語には 2 つのパターンを再建すれば良いことを示した。また，与那国方言にはかつて接続形と連用形の区別があったこと，二重母音と撥音では音節量の共時的扱いが異なることを主張した。

一方で，次のような点がこれからの課題としてあげられる。

(11) a.　表 2 は共時規則として複雑すぎるのでは？
　　b.　aN「ある」の C パターンは古態か改新か？
　　c.　B パターンからの Bb, Bc, Bcc への派生が共時規則として認められるか？

得られたデータを例外が少なくなるように解釈したのが表 2 だが，規則として複雑すぎ恣意的な印象がある。語の長さが関わっていることは確かだが，見落としている要素がありそうだ。

aN「ある」のアクセントには上野（2011）と発表者のデータとで一致しない部分があり，発表者のデータでは aru], arja]のように上野（2011）よりも C 型で一貫している。これが改新とすれば，B > C という変化を認める必要が出てくる。否定接辞*-nu-*が付くときの音調の再建にも関わってくる。

共時規則かの判断には無意味語によるテストなどが考えられるが，発表者が簡単に行った範囲では，無意味語では基本形が A 型となるようだ。別の方法などを考える必要がある。長い語形での C 型 > B 型への改新は，外来語にも見られるなど共時的にも有効な規則と思われるが，C > B の変化と動詞アクセントの交替の確立の時期，分節音の変化の時期の相対年代などには議論が必要である。

記号

「○: ○から高くなる。　○˥: ○の後が低くなる。　-: 形態素境界。　+: 語境界。

参考文献

上野善道（2000）「奄美アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42–54.
———（2010）「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』34: 1–30.
———（2011）「与那国方言動詞活用形のアクセント資料(2)」『国立国語研究所論集』2: 135–164.
———（2012）「与那国方言動詞活用形のアクセント資料(3)」『琉球の方言』36: 57–91.
———（2014）「琉球与那国方言のアクセント資料(3)」『琉球の方言』38: 69–92.
———（2015）「琉球与那国方言体言のアクセント資料(4)」『琉球の方言』39: 165–193.
金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究　原理と方法』東京: 塙書房. 306pp.
中澤光平（2018）「与那国方言の複合語アクセントと音韻解釈」『第 32 回日本音声学会全国大会予稿集』: 132–137.
平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』東京: 東京堂. 220pp.
松森晶子（2000）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発―沖永良部島の調査から―」『音声研究』4(1): 61–71.
———（2012）「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1): 30–40.